

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12727

研究課題名(和文) ナイル川の水資源の配分の交渉プロセスの解明：中東政治変動との関連に着目して

研究課題名(英文) Understanding the process of negotiation for sharing transboundary water resources with a special focus on the emerging Middle East-Nile Basin Nexus

研究代表者

Mohamed Abdin (Abdin, Mohamed)

東洋大学・国際共生社会研究センター・客員研究員

研究者番号：40748761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ナイル川水資源をめぐる対立構造は、ナイル流域当該諸国の内政に起因する要素が強いことを明らかにした。2020年6月にアジア経済研究所の『アフリカレポート』に投稿した論考では、スーダンの内部主体間の対立と、外部主体との関連を解説した。また、バシール体制のエチオピアルネッサンスダム容認の姿勢も、体制生存戦略の観点からなされたが、結果として、その行動がエジプトのスーダンへの関与を強める結果を招き、バシールを失脚の追い込む要因となった。この分析は2023年3月に、アジア経済研究所に共著のディスカッションペーパーとしてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ナイル川流域問題を取り巻く環境や関連する諸アクターを俯瞰して研究をすすめてきたことにより、サブサハラアフリカと中東北アフリカ地域間の壁を越えた越境的地域研究の視点の重要性を示すことができた。垣根を超えた地域研究こそ、複雑な現実をより正確にとらえる分析枠組みであり、今後本分析の枠組みを活用した他地域の研究に影響が及ぶことを期待したい。

研究成果の概要(英文)：Through a depth analysis on the negotiation process of the Nile Water Resources, this research aimed at examining the possibility of cooperative model of the usage of Nile Water between the East Nile Riparian states.

After conducting extensive research on the political environment in the riparian States, the research reached to the following conclusions: (1) The attitude of riparian States on the negotiation process has been shaped by the internal politics dynamics of each state. On my June 2020th article in [Africa Report], I tried to discuss how the internal political actors in Sudan has leveraged the contentious regional political environment --specially the Nile Water Negotiation process-- to achieve their goals at home.(2) In a discussion paper published at IDE's web site I explained how Bashir's endorsement of the Grate Ethiopian Renaissances Dam as part of regime survival strategy had rallied Egypt against his regime and accelerated its collapse in April 2019.

研究分野：地域研究

キーワード：エジプト・スーダン関係 ルネッサンスダム スーダン暫定政府 中東食糧の安全保障 スーダン軍部
クーデタ エチオピア内戦 ナイル川

1. 研究開始当初の背景

ナイル川流域諸国の水資源をめぐる国家間関係の緊張の背景には、当該諸国における人口増加、生活水準の向上、経済開発による農業及び工業に利用される水量の増加を背景に《水の希少性》が近年急速に高まっていること、加えて、地球規模で起きている気候変動により、ある地域では干ばつが続く一方で、他の地域では洪水が起きるといふ、予測不可能な《水の変動性》が指摘できる。この予測不可能性は、経済政策、防災政策、及び社会政策のすべてを困難にするため、国家政治の不安定化の要因となっている。また、ナイル川は水源が複数国にまたがっている「国際河川」であり、水源開発をするには流域諸国間の協力が必要不可欠であるが、多くの場合においてその利害は対立する。

国際河川流域の水の希少性と紛争の関係については、国際関係学の観点からいくつかの重要な理論が存在する。リアリスト及びネオリャリストの観点からは、国際河川の地理的条件、流域諸国における水の希少性の度合い、流域諸国間のパワー関係が協調か対立の選択を左右する。さらに、これらの要因が複雑にいくつものパターンに分かれるので、これらの条件と協調行動及び紛争発生メカニズムの関係を関連付けることは容易ではない。流域諸国間の行動(協調または対立)を規定する要因としては、水の希少性と変動性の度合いと上流下流諸国間のパワー関係がある。

国際法の観点からは、国際河川の水資源の利用に関しては、合理的利用(下流国に甚大な被害をもたらさない程度に水資源を開発すること)、公正な利用原則(それぞれの流域諸国における水資源の経済的・社会的ニーズ、他の水資源の有無といった状況を総合的に計算)がある。1997年に「国際河川の非航行利用に関する国連条約」が採択され、これが国際河川の水資源利用のガイドラインとなっているが、流域諸国間ではその内容の解釈をめぐって対立している。すなわち、上流諸国は自国内を流れる河川の水資源を享受する権利を主張しているのに対し、下流諸国は、上流での水資源の開発が自国に甚大な被害をもたらす可能性があり、自国の同意なしに新たな水資源の開発を行ってはならないと反論する。さらに、ナイル以外にも水資源が豊富な上流に対して、下流諸国はそれらの資源の活用を提案している。

2. 研究の目的

本研究は、流域内政治の変容に加え中東全体の勢力図の変化と政治的軍事的諸同盟の再編を俯瞰しつつ、中東の政治環境の変化とナイル川の水資源の配分の交渉プロセスとの関連について、国際関係学の観点から分析することを主たる目的としている。より具体的な目的は以下の2点である。

- (1) ナイル川の水資源の配分をめぐる流域諸国間の対立と共生の可能性を探る
- (2) 地域の垣根を超えたトランス地域視点で、流域外地域大国の本問題への影響について調査し、域外諸アクターの関与による内部主体間のパワーバランスの変容を解明する

3. 研究の方法

- (1) 関連文献の渉猟による先行研究の整理
- (2) リモート調査(インターネット通話による聞き取り調査)、および現地調査によるより深い内部主体間の対立構造の分析を目的とした聞き取り
- (3) さまざまな研究会などにおけるエジプト、スーダン、エチオピア研究者とのディスカッションと共同研究・共同発表を通じた、分野横断的かつトランス地域の視点による情勢分析

4. 研究成果

研究期間はCovid19の影響により2年間延長されて5年間にわたった。現地調査が実施できない期間が長かったが、毎年度、最低限一つの成果を社会に発信することができた。現地で調査ができない一方で、国際会議やワークショップがオンライン化され、世界中の研究者との議論が可能となった。代表的な成果は以下のとおりである。また研究期間が終了した現在においても、引きつづき未発表の成果を形にすべく取り組んでいる。

- (1) バシール政権の外交におけるナイル川問題の利用について分析した。2019年12月にタイのマヒドン大学で開催された国際会議でこの成果を発表し、多くのフィードバックをいただいた。この際、メコン川の専門家との交流が実現し、メコン川の水資源の配分プロセスか

- ら多くの示唆をいただいた。
- (2) ナイル川地域の安全保障環境の変化をスーダンの政治プロセスと絡めて分析した。この成果は、2020年5月の日本アフリカ学会において発表した。
 - (3) バシール体制の崩壊における地域大国の役割や、暫定政府発足に至る政治プロセスにおける内部外部主体間の権力関係のダイナミクスについて分析した。この成果は、『アフリカレポート』第58号に「バシール政権崩壊から暫定政府発足に至るスーダンの政治プロセス：地域大国の思惑と内部政治主体間の権力関係」というタイトルの論考として発表した。
 - (4) 南スーダンの内戦をエチオピア内戦と関連付けながら水資源を含むより広い視野で分析した。この成果は、上智大学アジア文化研究所・アフリカ研究セミナー（アフリカ学会関東支部例会）主催による「混迷する北東アフリカ情勢 - エチオピア・スーダン・南スーダン」と題するウェビナーにおいて「スーダン民主化の試みの失敗 軍部によるクーデターを可能とした国内的・地域的・国際的な政治環境の分析を中心に」として発表した。それぞれの地域の専門家（エチオピアの眞城百華氏、南スーダンの村橋勲氏）とともに地域を取り巻く環境についてディスカッションを実施した。200名を超す参加者に広く研究成果を発信した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 アブディン モハメド	4. 巻 58
2. 論文標題 バシール政権崩壊から暫定政府発足に至るスーダンの政治プロセス 地域大国の思惑と内部政治主体間の権力関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アフリカレポート	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24765/africareport.58.0_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アブディン・モハメド	4. 巻 Vol. 18, No. 2
2. 論文標題 バシール政権崩壊の背景と今後の展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中東動向分析	6. 最初と最後の頁 13~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 アブディン モハメド
2. 発表標題 「2022年10月クーデターの背景」
3. 学会等名 「中東木曜フォーラム」主催ウエビナー「スーダン緊急情勢報告会」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アブディン モハメド
2. 発表標題 「スーダン民主化の試みの失敗 軍部によるクーデターを可能とした国内的・地域的・国際的な政治環境の分析を中心に」
3. 学会等名 上智大学アジア文化研究所アフリカ研究セミナー「混迷する北東アフリカ情勢－エチオピア・スーダン・南スーダン」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 アブディン モハメド
2. 発表標題 ナイル川の水資源開発と流域安全保障上の挑戦
3. 学会等名 第57回日本アフリカ学会学術大会（於：オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 アブディン モハメド
2. 発表標題 ナイル川の水資源開発と流域安全保障上の挑戦：エチオピア・ルネッサンスダム建設を事例に
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会、東京外国語大学
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mohamed Abdin
2. 発表標題 Water and Sudanese Foreign Policy: The Case of the Nile River Basin
3. 学会等名 International Conference on Resources and Human Mobility, 於Mahidol University International College (MUIC), Thailand (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アブディン モハメド
2. 発表標題 スーダン情勢、スーダン・エジプト関係および紅海沿岸情勢その他
3. 学会等名 JETRO アジア経済研究所 「中東政策提言研究」、於ジェトロ赤坂本部（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 モハメド・アブディン
2. 発表標題 スーダンにおけるバシール政権崩壊の背景と今後の展望
3. 学会等名 日本アフリカ学会関東支部例会・上智大学アジア文化研究所 第2回アフリカ研究セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アブディン・モハメド
2. 発表標題 「ナイルは誰のものか？ 水資源の配分をめぐるナイル川流域諸国間の対立と協調の可能性」
3. 学会等名 京都大学第240回アフリカ地域研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------